観覧車回れよ回れ想ひ出は
君には一日我には一生

栗木京子

この短歌から、うれしさと共に、切なさ、悲しさも伝わってきました。一緒に一つの観覧車に乗れた喜びやうれしさが最初に読まれていて、でも、回るにつれ、その幸せも終わりの時がくるからとても悲しい。そして、自分にとっては、この時間は一生ものの思い出であり、宝。でも、相手にとってはたった一日の思い出、出来事のようにしか思ってもらえない。そんなところから、すごく切なくて、悲しい思いが伝わってきました。きっと、この短歌には、片思いの恋の気持ちが、「観覧車」や「回れよ回れ」にこめられていたのではないかと思います。

この思いを味わうには、「想ひ出は」までは早く、「君には」からはゆっくり静かに読むと良いと思います。

（山川夢理彩）

観覧車回れよ回れ想ひ出は
君には一日我には一生

栗木京子

この短歌を読むときは、ゆっくりと、「君には」と「我には」にちがいをつけて読む。そうすれば、二人の今日の想い出の量の違いが分かりやすい。この短歌は、片思いの人を誘って観覧車に乗ったときのことを詠んだ歌で、あくまで片思いのため、相手にとっては一日分と、薄い思い出である。しかし、自分にとっては「我には一生」というところから、大好きな人と乗れた喜びから、乗っていた時間以上に深く思い出として残ったことが分かる。

（古川大樹）

短歌を味わう

観覧車回れよ回れ想ひ出は
君には一日我には一生

栗木京子

この短歌の作者は、片思いをしているということが分かる。それは、「君には一日我には一生」というところからである。「想ひ出は」と「君には……」の間を少し開け、「想ひ出は」の「は」を少し伸ばして読むといいだろう。

この短歌からは、過去のことを思い返していることが分かる。「回れよ回れ」は、観覧車が回るのではなく、好きな人と一緒に乗ったときのことを思い出しているのだ。観覧車のようにゆっくり思い返していることがよく分かる。

相手のことを強く思っているため、想い出が頭から離れず、二人で観覧車に乗ったことを一生の宝物と思っていることだろう。

（古沢雅也）

短歌を味わう

死に近き母に添寝のしんしんと
遠田のかはづ天に聞ゆる

斎藤茂吉

死に近い母に最後に一つ甘えている感じ。添い寝すると母がいなくなってしまうという悲しくなり、静かになる様子。静かに添い寝していると、カエルの鳴き声がしんしんと聞こえてくる。かえるの鳴き声が自分の鳴き声になっているようなふうに思う。

人が甘える気持ちを歌にしていると思う。だから、読むときは、悲しい歌として、静かに、ゆっくりと読むのが良いと思う。人の感情が入っている良い歌だと思う。

（青木爽香）